

# 第二次世界大戦期のフランスにおける子どもたち

天 野 知恵子

第二次世界大戦は、人類史上最多の犠牲者を出した戦争であった。アジアにおいてもヨーロッパにおいても悲惨な状況が繰り返されたが、人びとの戦争体験は、国により地域によりさまざまである。

本稿は、フランスにおける第二次世界大戦を取り上げ、これを「子ども」の観点から再検討したとき、その特徴をどのようにとらえることができるかを考察する試みである。以下ではまずその前提として、第二次世界大戦期や戦後の子どもたちのさまざまな「体験」を、できるだけ具体的に紹介していきたい。実のところ、この戦争に関わるフランスの子どもたちの体験は、彼らの立場や身分や状況によって大きく異なる。そしてその点に、フランスにおける第二次世界大戦の特徴を見出すことができる。本稿では、今日子どもたちにこの戦争がどう語られているかという点にも注意を払いながら、「子ども」を通してフランスにおける第二次世界大戦について考えてみたい。

## 1 現在の子ども向け読み物にみる「占領期」

1939年9月、ナチス・ドイツによるポーランド侵攻とともに始まった第二次世界大戦は、「奇妙な戦争」とよばれた8ヶ月間におよぶ独仏間の無戦闘状態を経て、1940年5月、ドイツ軍によるオランダ、ベルギー、ルクセンブルグへの攻撃開始とともに、あわただしい展開を見せる。ドイツ軍はこれらの国々を下してフランスに侵攻し、6月14日、パリへ無血入城した。6月22日に結ばれた仏独休戦協定は、フランスの降伏を告げるものであった。これにより第3共和政は崩壊し、7月10日には、ペタンを国家主席とするヴィシー政府が成立した。この後フランスは、占領を続けるドイツ軍と、ドイツへの協力を前提とするヴィシー政権の下で、「占領期」の4年間を経験することになる<sup>1)</sup>。

第二次世界大戦期は、現在を生きるフランスの子どもたちには、どのように語り伝えられているであろうか。まずは、この問題からはじめよう。

その手がかりとして、初等教育段階の子ども向けに書かれた歴史読み物を紹介してみたい。これは、ある時代の社会について、時代状況の説明をまじえながら、フィクションではあるが半ば実話的な物語を展開する児童書である。子ども向け歴史漫画が多い日本とは異なり、フランスではこうした本や絵本が何種類も出版されている。ここでは例として、ガリマール・ジュネス社の『第二次世界大戦期の子どもの日記』を取り上げてみたい。物語は、ひとりの少女を主人公にして、彼女がつける日記の形で語られる<sup>2)</sup>。

レオノールは、戦争が始まった39年9月に11歳で、パリに住んでいる。郵便局に勤める父は出征し、「奇妙な戦争」の間も物資は不足していった。ほどなくドイツ軍が迫り、レオノールの家族はパリから逃げ出そうとするが、駅での混雑がひどくて帰宅せざるをえなかった。敗戦とヴィシー政府の成立を、レオノールも兄のアンリも苦々しく感じる。父はドイツ軍の捕虜になってしまい、敗戦後もフランスに戻ってはこなかった。

レオノールには、レアというユダヤ系ポーランド人の親友がいた。レアの家族は迫害を避けるためにフランスに移住してきたのだったが、ユダヤ人に対する差別は、フランスにおいてもひどくなっていく。42年5月、レオノールは、「黄色い星」を胸につけることを強制されて泣くレアの手を引きながら学校へ行き、「子どもたちまで責め立てるなんて！」と怒りを覚える。そして7月16日、パリのユダヤ人たちが多数逮捕された。そこには、レアとその家族も含まれていた。レオノールは心を痛め、以後はずっとレアの行方を気にかけることになる。

43年春、ドイツへ労働力として強制徴用されるのを嫌い、アンリが家出した。そしてレジスタンスの活動に加わった。やがて、見知らぬ男が兄の消息を伝えるにレオノールの家を訪ねて来る。アンリがたいへんな危険をおかしていると知って、母はガタガタと震えるのだった。44年に入ると、物資はますます不足し、ガスや電気も止まりがちになる。レアのいない学校はさびしく、レオノールは勉強意欲を失って母とともにパリを離れ、ノルマンディの祖父母のもとに身を寄せた。

彼女はそこで、連合軍の反撃を目の当たりにする。ほどなくフランスは解放され、レオノールは兄と再会した。45年になると、父もまもなく帰るとの便りをよこした。だが、レアは帰ってこなかった。ユダヤ人強制収容所から生還した人たちもいたのだが、みな骸骨のように痩せこけていた。

レオノールは自分を恥じる。自分はなんと無頓着であったのか、と。戦争は終わったが、女性や子どもがたくさん犠牲になったことを知ったレオノールは、将来医師になろうと決心する。

この物語を読むと、第二次世界大戦下のフランスにおいては、人びとがバラバラに引き裂かれたという印象を強く受ける。東の間の戦闘の後、敗戦によって多くのフランス軍兵士が、レオノールの父のように捕虜として実際にドイツに留めおかれた。国土も当初、ドイツ占領地域と自由地域とに分けられた。さらに、占領軍やヴィシー政府に協力的なフランス人がいた反面で、反対し抵抗する人びとがいた。その上、昨日までは隣人や友人であった人びとの一部が、「ユダヤ人」として差別され、逮捕されて姿を消していった。レオノールもそのようにして、まず父に、次いで親友に、さらには兄に生き別れ、心細い思いで母とともにパリを去る。

友人に「ユダヤ人」がいるとか、家族の誰かがレジスタンス活動に加わった、とする設定は、他の子ども向け歴史読み物にも見られる。そうした状況におかれた子どもたちは、レオノールのように、いつも不安と恐怖を感じながら毎日を過ごしている。「占領期」の新聞やラジオは真実を伝えず、いなくなった人たちの消息は不明のままであるからだ。また、ユダヤ人やレジスタンス活動家を密告するフランス人を登場させる物語もある<sup>3)</sup>。このように、今日のフランスの子ども向け歴史読み物は、この国の第二次世界大戦期を、家族や友人、ひいては国民が分断されて引き裂かれ、差別や迫害、敵対や抗争の中に投げ込まれた時代であったととらえている。そして、そうであるから子どもたちもつねに、強い緊張をよぎなくされたと描いているのである。

## 2 ルタバガのパリ

実際に第二次世界大戦期を生きたフランスの子どもたちは、どのような日々を送ったのであろうか。ここでは、1932年7月にパリで生まれ2003年に死去したジャン＝ルイ・ベッソンの『パリ、ルタバガ』を紹介してみたい。彼はイラストレーターとして成功をおさめ、広告や雑誌、映画、ポスターから児童書にいたるまではば広く活躍した人物である。『パリ、ルタバガ』は、彼が子ども時代を過ごした第二次世界大戦下の日々を回想して書かれた。はしがきの中で彼は、「その時代に見たり聞いたりしたこ

とを、できるだけ忠実に思い出して」書いたと言っている<sup>4)</sup>。この戦争について子ども向けに語ることが目的ではないとしているが、親しみやすいイラストと平易な文章とによって、『パリ、ルタバガ』は子ども向けの読み物としても、優れた作品に仕上がっている。なお、ルタバガは家畜の餌用のカブで、ふだんは人の食べるものではない。物資が不足していた時期ならばこそその食糧であった。

ジャン＝ルイはカトリックの信仰あつた家庭に生まれた。家族や親しい友人の中には、「ユダヤ人」やレジスタンスのメンバーとなるような人物はいない。父も画家・イラストレーターで、一家は裕福でこそなかったが、1939年の夏にはノルマンディーの海岸でささやかな休暇を楽しんでいた。戦争開始とともに父は出征し、他の家族は帰宅せずにブルターニュに住む伯父を頼ることにした。混雑する鉄道を利用してようやくたどりつき、新しい生活を始める。当初は、戦争らしいことは何も起こらなかった。だが、40年6月にドイツ軍がフランスに侵入すると、パリや東部から逃げてくる人びとの車列が道路を埋めるようになった。町はずれにいたイギリス兵も引き上げ、かわりに、ドイツ兵がやってきた。

戦争はすぐに終わり、幸運にも父が戻ってきた。そこで一家は40年9月にパリに帰る。その頃には学校にも商店にもペタンの肖像が掲げられ、「ユダヤ人とフランス人」という展示会が開かれて、ユダヤ人には気をつけなくてはならないと教えていた。学童を歓迎した催しであったが、ジャン＝ルイの両親は息子をやるうとはしなかった。

モノが不足し、何を買うにも切符が必要で、店の前には長い行列ができた。いつでも買えるのはおいしくないルタバガだけだった。夜には灯火管制で真っ暗闇になった。それでも週に一度は映画を見に行ったり、休日にはピアノを楽しんだ。だが、この頃一家がラジオセットを買ったのは、楽しみのためでなくイギリスの放送を聞くためだった。密告されるおそれもあったけれど、音量を下げて聞いた。「それまでだれも聞いたことのない」ド＝ゴールという将軍が、イギリスとともに戦いを続けるべく彼に合流するよう呼びかけていた。だが、「いっしょになって戦いに勝てるなんて、パリではだれも本気にしなかった」<sup>5)</sup>。

42年7月の朝。母が青ざめ動揺していた。近隣のユダヤ人家族が多数、警察に連行されたのである。一家の住まいは下町のベルヴィルにあった。周囲には皮革製品の仕事場や靴製造工場が並んでいて、ユダヤ人が経営し

ていたところもあった。母は司祭に訴えた。ドイツがユダヤ人に行っていることは、「善いこととは思えません。恐ろしいことです」と。すると、司祭はこう返事した。「ユダヤ人はかつて、イエスを十字架にかけさせたのですよ！ いつかは彼らが災難にあうと、われわれも知っていました。そうではありませんか？」10月の新学期には、新しく来た教師が、なくなった生徒たちのことにふれた。彼らは帰ってくるかもしれないし、二度と会えないかもしれない。今ここにいられる幸せな君たちには、彼らに思いを巡らせて欲しい、と。教室では「しばらくの間、だれも一言も言わなかった」<sup>6)</sup>。

そして44年6月。連合軍のノルマンディー上陸は、「長い間待っていたが、実現するとは思われなかった大ニュース」だった。父は壁に地図をはり、連合軍の進撃状況をピンと紐で示すようにした。けれども父は、7月にヴィシー政府のラジオ論説委員アンリオがレジスタンスに暗殺された時には、こう言った。「話したり意見を言ったりさせないように、誰かを殺してしまう権利などない」。やがてドイツ軍がパリから撤退を始めた。8月24日には市街で戦闘があったが、夜には教会の鐘が一齐に鳴り出して、パリ解放を告げた。「窓にろうそくを灯し、通りに出て、だれもかれもが抱き合った」<sup>7)</sup>。

毎週何食わぬ顔で教会に来ていた近所の人が、実はレジスタンス秘密組織の将校だった。広場では、ドイツ人将校とつきあっていた女性が髪を剃られ、学校では、ドイツびいきだった女性教師が姿を消した。また、ドイツに味方し義勇兵として出征した知り合いの青年も、帰ってこなかった。熱心なカトリック信者で、「キリスト教最大の脅威である共産主義」と戦うため東方に旅立ったのである。他方で、姉がピアノをならっていた先生にも、二度と会えなかった。胸につけた黄色い星を、毛皮の長いコートでいつも隠すようにしていた女性だった。クラスでひとりだけ、ユダヤ人強制収容所から戻ってきた生徒がいて、彼は英雄になった。こうしたさまざまな結果とともに、戦争が終わったのである。

「拳国一致」が掲げられた第一次世界大戦においては、フランスの子どもたちはいつも、父や兄は祖国を守るために戦っているのだと聞かされた。フランスの勝利をめざし、国民が一体となることが大切だと教えられたのである。その祖国が崩壊し、国民が分断された第二次世界大戦期にはどうだったのであろうか。『パリ、ルタバガ』にはこう書かれている。「カトリッ

クの家庭に生まれ、ユダヤ人や共産主義者ではないので、占領軍当局を恐れるどんな理由もなかった。いちばんたいせつなのは秩序であり、習慣を尊重することだった<sup>8)</sup>。とはいえ、一家はラジオでイギリスの放送を聞いていたし、画才を生かし家族ぐるみでパンの配給券を偽造していた。母はユダヤ人の運命に心を痛め、父もまた、共産主義と戦いに行くという若者の態度に首をかしげた。ベッソン家の人びとにとって、尊重すべき「秩序や習慣」は、ドイツ軍やヴィシー政府から示されるものではなかった。信心深く、家族・親族の絆を重んじ、強制や暴力を嫌い、日々を懸命に生きたこの家族が、おのずと築いてきた中にこそ、見出されるものであった。

### 3 レジスタンスの若き闘士たち

1944年6月16日、レジスタンス活動に加わり捕らえられた歴史家マルク・ブロックが、リヨン近郊の処刑場に引き出されたとき、彼のかたわらでは16歳の少年が震えていた。「痛いだろうな」。するとブロックは、やさしく少年の腕をとって言った。「とんでもない。痛くなんかないよ」。そして「フランス万歳！」と叫びながら、最初に倒れた<sup>9)</sup>——高名な歴史家の最期を伝えるこのエピソードに示されているように、ドイツ軍やヴィシー政府に反対して抵抗活動を行った人びとの中には、何人もの年若い闘士たちがいた。何が彼らを行動に駆り立てたのだろうか。

ここではまず、リュシー・オブラックの『孫たちに語るレジスタンス』を参照してみよう。彼女はかつて夫とともに、レジスタンスの活動家であった。夫が逮捕され、死刑を目前にしたときには、決死の作戦で夫を救出した。その劇的な活躍が、後に映画やテレビドラマにも取り上げられたという女性である。『孫たちに語るレジスタンス』は、自身の経験をふまえながら、レジスタンスについて子どもたちに説明するために書かれたものである<sup>10)</sup>。

ドイツはフランスを占領して、フランス軍兵士150万人を捕虜にし、国土に線引きして、フランス人から食糧を奪い、ドイツや中欧から逃げてきた人びとを引き渡すよう命じた。「なんと侮辱的なことだったでしょう！」とオブラックは言う。レジスタンスの最初の行動を引き起こしたのは、このような占領軍に従いたくない、言う通りにしたくないという気持ちであった。彼女が語る中に、16歳の学生マティウの話がある。彼は通学途上、

ドイツ兵士たちが電話線を敷設しているのを見た。戦争は終わったんだから彼らは帰るべきだと考えたマティウは、怒りを感じて線を切断する。彼は捕らえられ、銃殺されてしまったが、フランス人の心におのずと生じた、「抵抗精神」の一例を示したのだった<sup>11)</sup>。

そうした「抵抗精神」はやがて、最初の武器をもつようになる。オブラックはその武器が、銃でなく「情報」であったと語る。怒りを感じ、抵抗を訴えてチラシをつくり、印刷し、配布する——その過程で人びとが集まり、行動を共にしていく。オブラックはこのようにして、レジスタンスの組織化が行われていったと言う。彼女によれば、1944年には、多かれ少なかれ定期的に発行されていた地下刊行物が、200種類以上もあった<sup>12)</sup>。その背後には、「抵抗精神」に鼓舞され連帯した多くの人びとがいたのである。

1940年11月11日にパリで行われた学生たちのデモも、おのずとわき起こった「抵抗精神」と、情報の共有から生じたと言えようか。この日は第一次世界大戦が終結した日で、学生たちはずっと、父親たちがフランスを守った記念の日だと教えられてきた。また彼らの間には、10月末に反ファシズムの知識人ポール・ランジュヴァン教授が逮捕されたことに対する不満も高まっていた。「フランスの学生たちよ！ 11月11日は君にとって国祝日であった。抑圧的な当局の命令にもかかわらず、その日は心をひとつにする日となるだろう。講義には出るな。17時30分に無名兵士を称えに行くんだ。1918年11月11日は大きな勝利の日であった。1940年11月11日は、さらに大きな勝利の前兆となるだろう。すべての学生が連帯するのだ。フランス万歳！ この文章を書き写して配布してくれ」。ノートの切れ端に記されたこの呼びかけが、パリの学生やリセ生徒たちの間を駆けめぐった<sup>13)</sup>。

11月11日、凱旋門のあたりに数千の学生たちが集まった。彼らは、三色旗やドゴールを象徴するロレーヌ十字を模した花飾りを掲げ、ラ＝マルセイエーズを歌いながらシャンゼリゼを行進した。デモ参加者のひとりには、「本能的に行こうと決めた」と回想している。またある青年は、デモのことは知らず、劇場に「ル＝シッド」の公演を見に行くつもりで外出したところ、いつのまにかデモに参加していた。介入してきたフランス警官隊に背中を殴打されたが、そのまま劇場に向かい、演劇に見とれるうちに背中中の痛みを忘れたという<sup>14)</sup>。多くの学生たちにとって、この日デモに加わることは、ごく自然な流れに思われたのであろう。

彼らの中には、その後も活動を続け、抵抗運動に献身した若者たちもいる。パリのピュフォン・リセの5人の生徒がそうだった。同校の教授が逮捕された際に抗議活動を行い、やがて武装闘争に加わり、地下活動に入った。みな、パリのブルジョワ家庭の出身である。彼らは42年の夏に捕えられ、1943年2月8日に全員が銃殺された。そのとき17歳から20歳であった。彼らの最期の手紙には、両親や寡夫であった父への尽きぬ思いが書きつづられている。「お父さんにとってひどい打撃だとわかっています。が、気丈に、未来を信じて生きてくださるようお願いしています」。「かわいそうな愛するご両親、ぼくの最期の思いはあなたの方の事です！ ぼくはフランス人として死ぬことができるでしょう」。「ぼくは最期まで勇敢でいるでしょう。戦争はまもなく終わります。ちよっぴりはぼくのおかげで平和になったら、あなたがたも幸せでいられますよ」。「あなた方はぼくにすばらしい青春時代を送らせてくれました。ぼくはフランスのために死にます。後悔は少しもありません」。「ぼくが愛し、ぼくを愛してくれたすべての人にさようなら……ぼくたちは歌いながら旅立ちます」<sup>15)</sup>……

もっと年若い活動家たちもいた。ジネット・マルシェは1931年に、フランス西部の農民の娘に生まれた。ロンドンの放送を聞き、イギリスから物資を運んで来る飛行機に懐中電灯で合図を送る仕事をしたとき、12歳であった。彼女は後に、「その年齢にしては例外的な知性と冷静さ」を称えられている。また、西部サルト県に生まれたジャン＝ジャック・オデュックも、12歳で組織の伝令役をつとめた。自転車で50キロの道のりを移動したこともある。抵抗活動家だった両親が逮捕された後、ひとりでパリへ逃れた。パリでは親切な人びとの世話になったが、その中にはモンマルトルの売春婦たちもいた。それゆえ、解放後に彼女たちが髪を剃られて引き回されているのを見たときには、とても悲しかったと言う。両親は戦後に収容所から帰還したが、体をこわして、父は仕事ができなくなり、母は49年に死去した。ジャン＝ジャックはその後の人生を、林業にたずさわりながら過ごした。苛酷な少年時代であったがゆえに、人にはあまり会いたくなかったのだと言う<sup>16)</sup>。

この2人の場合もそうだが、年若き闘士たちの中には、抵抗運動に荷担した親の影響を受けて活動に入った者もいる。けれども、彼らが逮捕されたときには、そうしたことも、彼らの年齢も考慮されたわけではなく、ときには厳しい処罰が待っていた。ドゴールによって設立され、フランスの



解放に貢献したことを称えて認定された「解放の同志 Compagnons de la Libération」には、1,000を越す個人や団体が数え上げられているが、そのうちの18人が、レジスタンス活動に加わったとき18歳以下であった。彼らの中で、戦後を迎えることができたのは7人だけである。11人は処刑されたり、戦闘で命を落としたりした。最年少はブルターニュの農民の息子、マチュラン・アンリオである。巡回中のドイツ兵に尋問された際、レジスタンス活動家たちについての情報を与えることを拒んで、1944年2月に射殺された。そのとき14歳であった<sup>17)</sup>。

#### 4 ギイ・モケの肖像

「レジスタンスの若き英雄」として有名な人物の中に、ギイ・モケがいる。モケは1941年10月22日、17歳でドイツ軍によって銃殺された。パリのメトロには、彼の名前を冠した駅がある。また彼の肖像画は、切手の図案にも描かれた。このように、従来から名を知られていたモケが、近年また話題になったのは、2007年にフランス大統領となったサルコジが、選挙活動中から何度かモケに言及したためであった。サルコジはこの「フランスに命を捧げた青年」を、「過去でなく未来の模範」だと賞賛し、モケの遺した最期の手紙が、すべてのリセで読み上げられるとよいと述べたのである。サルコジは内相であった2005年に、パリ近郊で発生した若者の暴動に際して、暴動に加わった若者たちを「くず、ごろつき」と呼んで断固たる対策を打ち出したことで知られる。それだけに、青年の模範としてモケを称えるサルコジの発言には、反発や批判が寄せられたと同時に、この青年に対して、あらためて関心が向けられるようになった<sup>18)</sup>。ギイ・モケとはどんな人物だったのであろうか。

ギイの父プロスペル・モケは、鉄道員出身の共産党活動家で、パリ17区選出の代議士であった。1939年8月23日に独ソ不可侵条約が結ばれた際、フランス共産党はソ連の側に立ってこの条約を支持する。これに対して当時のダラディエ政府は、コミンテルンに与する活動を法によって禁じ、共産党の解散を命じた。おおぜいの共産党員が党を離れていく中で、プロスペル・モケは党に忠実であった。それゆえ逮捕され、議員権剥奪の上投獄されて、41年春にはアルジェリアに送られた<sup>19)</sup>。

ギイはプロスペルの長男で、1924年4月にパリで生まれた。早くから

党青少年組織に属して活動しており、父が逮捕されたときには、母に「父の戦いを続ける」と書いている。彼は街頭でビラを配ったりしたが、そうしたビラには、父の釈放を求める一方で、人民の権力としてソ連を擁護し、労働者が巻き込まれてはならない資本主義国同士の違いとして、戦争を批判する文章が見られる。ギイもまた党に忠実だったのであり、その指示に従って行動していた。彼の配ったビラには、フランスを占領するドイツ軍に対する批判は書かれていない。ギイは40年10月13日に、パリ東駅でひとりの仲間とともに逮捕された。共産党の活動を禁じる法に違反したからというのであった。だが1941年1月、パリの裁判所は彼に対して、監視付きの放免を言い渡した。未成年で、善悪の区別がつかずに行動したと判断されたのだった。しかしながら、投獄された共産党代議士の息子で、自身も早くから党の青少年組織で活動していた彼が、簡単に釈放されることはなかった。ギイは結局、41年5月に、ナントの北部シャトーブリアンにあるショワゼルの収容所に収監された<sup>20)</sup>。

そして1941年6月22日、独ソ戦がはじまった。ギイの運命は、ここから大きく変わっていく。コミンテルンは各国の共産党に対し、「ソ連人民の戦いを軽減するために」ドイツの戦争を妨害する作戦を指令したのである。フランス共産党は反ファシズムに方向転換し、共産党員によるドイツ占領軍へのテロ攻撃が開始された。これに対抗するべく、ドイツ軍当局は8月22日に、フランスにいるドイツ人が攻撃されれば報復として「人質」を処刑するという方針を打ち出した。「人質」とは、ドイツ軍かフランス政府によって逮捕されたフランス人男性で、ユダヤ系の人びとや共産主義者から先に選ばれるものとされた。その際、攻撃を加えた人物が若者であったならば、21歳以下の者も「人質」と見なすことが規定された<sup>21)</sup>。

41年10月、ドイツ人将校とドイツ軍関係者がそれぞれ、ナントとボルドーで暗殺された。これに対する報復として、「人質」の処刑が行われることになった。人選には、ヴィシー政府とドイツ軍が協力してあつた。内相ピュシュューはこのとき、彼が危険だと考えていた共産主義者たちに占領軍の目を向けさせ、そうでない収監者をできるだけ避けようとしたと言われる。ともあれ、ヴィシー政府側が提出したリストには、未成年者の名前は含まれていなかった。最終的には、ドイツ軍当局が処刑される「人質」を決定した。そこには、犯人の中に若者がいたとの目撃情報をふまえて、11人の未成年者が加えられていた。うちのひとりが、ギイ・モケであった。

このようにして、ドイツ軍へのテロ活動に対する報復として処刑された「人質」は、1941年10月から12月の間に193人にのぼった<sup>22)</sup>。

ギイは処刑場に引き出される前に、家族に宛てて最期の手紙を書いた。「愛しいママ、大好きな弟、愛するパパ、ぼくは死にます！ あなたがたに、とりわけ、愛しいママをお願いしたいこと、それは勇気をもってほしいということです。ぼくもそうします。先に逝った人たちと同じくらい、勇敢でありたいのです。確かに、ぼくは生きていたかった。でも、ぼくが心から望んでいるのは、ぼくの死が何かの役に立つことです……愛しいパパ、ぼくはママに対してと同様、パパにもひどく辛い思いをさせていただきましたが、最後のお別れをします。パパがぼくに示してくれた道を進むため、最善を尽くしたのだとわかって下さい。すべての友と大好きな弟に最後の別れをします。一人前になれるよう、弟がいっぱい勉強しますように。17歳半！ ぼくの人生は短かった！ けれども、あなたがた皆とお別れしなければならぬこと以外、悔いはありません……」<sup>23)</sup>

ドイツ軍への抵抗運動に荷担したため処刑されたわけではないのに、ギイ・モケが死後、悲運のレジスタンス活動家として知られるようになったのは、共産党のプロパガンダによるところが大きい。独ソ戦開始以降、フランス共産党は積極的なレジスタンス活動を通して再生していった。そして、独ソ不可侵条約を支持した過去を払拭し、フランスの解放に尽力した功績を強調しようとした。ナチスに果敢に抵抗し、祖国に命を捧げた愛国者の党、「銃殺された75,000人の党」というイメージを作り上げていったのである。その過程で、ギイ・モケの名前がさかんに語られた。ドイツ軍の残酷な仕打ちによって命を絶たれた年若い犠牲者として、注目を集めることができたからであった。こうして彼はいつのまにか、「レジスタンスの共産党」を、ひいては、レジスタンスそのものを象徴する英雄になっていったのである<sup>24)</sup>。

ギイ・モケは活動的な青年であった。ソ連を理想の社会と考え、共産党に忠実であった父を尊敬し、自分もその道を歩むため、困難な状況の中で行動した。と同時に、母を愛し、弟をやさしく思いやる兄でもあった。彼はまた獄中で恋もした。やはり党青少年組織に属していて収監されたひとりの少女に、心を奪われたのである。処刑の前、彼は「君を愛する仲間より、いっぱい大きな愛をこめて」彼女に別れを告げている<sup>25)</sup>。愛する人びとを気遣いながら、彼は死んでいった。その最期の手紙からは、確実に

迫り来る死を前にして、遺していく人びとへの尽きない思いと、非情な運命に果敢に立ち向かおうする意志を感じ取ることができる。その点は、先に見たビュフォン・リセの生徒たちも同様であったと言える。

## 5 強制収容所に送られた子どもたち

現代史家アネット・ヴィヴィオルカによる『娘と話すアウシュヴィッツってなに?』は、第二次世界大戦中、ユダヤ人の大量殺戮がどのようにして行われるにいたったかを、子どもたちに語るために書かれたものである。ヴィヴィオルカ自身、アウシュヴィッツで祖父母を亡くしている。この中で彼女は、1942年7月16日、17日のパリで行われたユダヤ人の大量逮捕——ジャン＝ルイ・ベッソンの母を震え上がらせ、後にヴェル・ディヴの一斉検挙として知られるようになる事件——について、次のように説明している。「恐ろしいヴェル・ディヴの一斉検挙事件からすべては変わったの……このとき逮捕されたのは、とくに女と子どもたちだった」。それまでに拘束されていたのは、ほとんどが外国出身のユダヤ人男性であった。それゆえその妻子はまだ、多くが家にとどまっていたのである。逮捕された後、「母親たちは子どもから引き離された。身が引き裂かれるような光景よね。そして母親たちは強制移送されたの」。子どもの方はしばし国内の収容所に留めおかれていたが、結局は子どもたちも移送された<sup>26)</sup>。

1940年にフランスには、33万人のユダヤ人がおり、うち半数が外国系ユダヤ人であったと言われる。ヴィシー政権下でのユダヤ人迫害は、ユダヤ人の身分の定義や人口調査・登録にはじまり、就業や所有や行動の自由の制限、「黄色い星」の着用強制等にいたるまで、しだいに厳しさを増していった。1941年5月には最初の一斉逮捕も行われ、約3,800人の外国系ユダヤ人男性が逮捕された。外国系ユダヤ人の女性と子どもが多数検挙されたのは、ヴィヴィオルカの指摘にあるように、1942年7月のパリ、つまりヴェル・ディヴの一斉検挙が最初である。しかしながら、フランスを占領していたドイツ軍当局も、この頃にはまだ、子どもを連行することまで考えていたわけではなかった。それを提案したのはむしろ、ヴィシー政府の側であった。ヴェル・ディヴの一斉検挙に先立ち、首相ラヴァルは、「人道的意図」から16歳以下の子どもも両親に同行させるように求めたという<sup>27)</sup>。なぜこのような提案がなされたのであろうか。

フランスからアウシュヴィッツなど東方の強制収容所へ移送されて殺害されたユダヤ人の記録を丹念にたどる調査を続けているセルジュ・クラルスフェルトによれば、3つの点が考えられるという。ひとつは、移送するようドイツから求められる人数に、大人だけでは不足するからというのである。ユダヤ系のフランス人を守るためにも、ユダヤ系外国人の子どもを加える必要があった。次に、子どもだけ残されても、世話することができないとの考えがあった。さらには、街頭で親子を引き離せば愁嘆場になり、パリ市民に刺激を与えるという懸念もなされた<sup>28)</sup>。このようにして、1942年7月16日、17日の両日、パリではフランス警察の手によって、およそ13,000人が検挙された。うち、16歳未満の子どもを同伴しない約2,000人の男性と3,000人の女性はただちに、パリの北にあったドランシー収容所に入れられた。残りは、パリの冬季競輪場（ヴェル・ディヴ）に連行されたが、そこには、1,000人強の男性、3,000人弱の女性に加えて、4,000人以上の子どもたちがいた。しかも、この子たちの4分の3が、親はたとえ外国籍であっても、自身はフランス国籍をもっていたのである。暑さと飢えと渇きの中、競輪場で5～6日を過ごした人びとはやがて、パリの南にあったピティヴィエとボヌ＝ラ＝ロランドの収容所に送られた<sup>29)</sup>。

子どもも移送可能かと、パリからベルリンへ問い合わせがなされた。返事を待つ間にも、親たちが先に移送列車に乗せられ、子どもたちは劣悪な環境の中に残された。7月の逮捕から一月後、移送を待つ子どもたちもドランシー収容所へ送られたが、彼らの様子を、世話係であった一女性は次のように回想している。「15か月の子から13歳の子までいましたが、その汚さと言ったら、筆舌に尽くしがたかったです。4分の3は化膿したとびひだらけでした」。シャワーを浴びさせるため裸にすると、「みな恐ろしいくらい痩せこけて、本当にほとんどすべて傷だらけでした」。しかもほぼ全員が赤痢にかかり、「下着は信じられないくらい汚れていました」。それでも子どもたちは、一番大事なものを見せてくれた。父や母の写真である。母親たちはそこに、走り書きの優しい言葉を残していた。母子が引き離された悲しい瞬間を思い、「私たちはみな泣きました。お母さんたちはどれほど辛かったことでしょう」。世話係の女性たちにできたのは、また会えるからね、と真実でない慰めの言葉をかけることだけであった<sup>30)</sup>。

そして子どもたちも移送された。さらに8月末には、ドイツ占領地域ではない南部においても、子どもを含めた一斉検挙が行われた。こうして、

フランス全土で、国籍を問わずユダヤ系の子どもの命が危険にさらされることになった。「在仏ユダヤ人総連合 (UGIF)」の監督下にあった児童施設さえ、安全ではなかった。UGIFは、フランス全土のユダヤ人をまとめるべく、当局の承認の下で合法的な存在を許された唯一のユダヤ人組織である。傘下の施設では、親が早くに逮捕されたりしていなくなった子どもたちを保護していた。にもかかわらず、解放を目前にした1944年7月、そうした施設からも数百人の子どもたちが連れ去られて、移送されていたのである<sup>31)</sup>。

さらに、ヴィシー政府は結局、ユダヤ系のフランス人を守ることもできなかった。「女子どもを捕まえて、いったい何になるというのだろうか？ 戦争中の国にとって、そんなことをするのは途方もなくばかげたことではないのか？」今はみな理性を失っていて、こんな単純な問いかけもなされない——1943年10月に、日記にこう書いたエレヌ・ペールは、1921年にパリで生まれた<sup>32)</sup>。ユダヤ系だがフランス社会に同化した教養あるブルジョワ家庭に育ち、父はグランド・ゼコール出身のエンジニアで企業の幹部、エレヌ自身はソルボンヌ大学の学生であった。彼女はUGIFのヴォランティアのスタッフとして、子どもたちの世話にあっていた。同胞の役に立ちたいと、逃げることなく踏みとどまっていたのである。だが、フランス国籍をもっているUGIFのメンバーであっても、迫害を免れることはできなかった。彼女は1944年3月に両親とともに逮捕された。そして45年4月、ベルゲン＝ベルゼンの収容所で殺害されている。

1942年3月から44年夏までの間に、フランスにおける逮捕・拘禁・強制移送によって18歳未満のユダヤ系の子どもたち約11,000人が命を落とした。うちの約6,000人は12歳以下であった<sup>33)</sup>。その中のひとりの少女が、ピティヴィエの収容所から父に宛てて書いた手紙を紹介しよう。「…ここでは、力が全部ぬけていくようです。私はすごく痩せてしまいました。今病気です。その上、水疱瘡にもなりました」——1931年にパリで生まれたマリ・ジュランは、逮捕されたとき10歳であった。彼女の父はこのとき、フランス北東部のアルデンヌにおいて強制労働に従事していた。「お父さんは元気でいて下さいね。とくに、私みたいに病気にはならないで。私みたいに寂しがらないで。と言うのも私は、お父さんのことを思うと、ときどき泣いてしまうからです。お父さんを愛し、お父さんを強く抱きしめる娘、マリより」。先に母が移送された。そしてマリもまた、この手紙を書

いた3日後の1942年9月21日、35回目の移送列車に乗せられ、アウシュヴィッツに向かったのである<sup>34)</sup>。

フランスから東方の強制収容所へ移送された子どもたちの大部分は、帰ってこなかった。列車から降ろされたとき、そこで生き延びるわずかな可能性が残されたのは、労働が可能とみなされた青壮年者だけであった。幼い子どもたちは、そのほとんどがただちにガス室へ送られた。そこでは、「子どもであること」は、死を回避する理由になるどころか、即座の死の宣告を意味した。レジスタンス活動に関わったり、反政府的な言動を行った青少年たちが、未成年であったにもかかわらず殺されることがあったとしたならば、アウシュヴィッツに移送された子どもたちは、まさに年端も行かぬ子どもであったからこそ、殺されたのであった。

## 6 隠れて生きた子どもたち

第二次世界大戦中、フランスから移送されたユダヤ系の人びとは、フランス国籍をもっていた24,000人を含め、76,000人にのぼる。その中で18歳未満の11,000人が全体に占める割合は、14.2%である。16歳未満では12.3%になるが、この数字は、ベルギーのそれが20%であったことに比べると、明らかに低い。またイタリアでは、移送された人びとの21.5%は20歳未満であった<sup>35)</sup>。ゆえにフランスにおいては、移送された子どもの割合は、2つの隣国よりも少なかったとすることができる。この事実の背景には、子どもたちを助けようとした多くの人びとの努力があった。

デボラ・ドワークの『星をつけた子どもたち』は、具体例をたくさん示しながら、ナチス支配下のヨーロッパにおけるユダヤ系の子子どもたちに焦点をあてた貴重な研究書である。この中で彼女は、子どもを救うために重要だったのは何より、親が自分では守れないとあきらめて、子どもを人手に渡すことだったと述べている<sup>36)</sup>。実際、さまざまな人びとが、ユダヤ系の子子どもたちに手をさしのべた。たとえばユダヤ系の団体「児童救済協会(OSE)」は、もとは子どもの福利厚生をめざして作られた組織で、占領期にはUGIFの下部組織に位置づけられたが、子どもたちを施設に留め置くのではなく、匿い養ってくれる家庭へ送り届ける地下活動を独自に展開した。あずかってくれるフランス人家庭を求めて、パリから遠い西部や中部にまで、関係者や協力者が足を運ぶこともあった。また OSE は南部では、

より大規模にそうした活動を展開した。指導者ギャレルの働きかけによって、トゥールーズ大司教やモンターバン司教の支持が得られたこともあり、カトリックやプロテスタントの諸団体からも協力が寄せられたからである。南部のほぼ全域に、子どもを匿い保護するためのネットワークが作りあげられた。OSEはそのようにして、第二次世界大戦下のフランスで、約5,000人の子どもの命を救うことができた<sup>37)</sup>。

偽造の身分証や出生証明書、配給切符などを子どもたちに与えて、施設や一般の家庭に秘密裏に託すことが行われた。フランス語を話せなかったり、キリスト教徒と見られない子どもの場合は、国外脱出もはかられた。あずけ先をさがしたり、子どもを連れて行ったり、偽の書類を作成したり、物資や資金を調達する作業は、相当の危険を伴うものであった。にもかかわらず、宗派を問わず、多くの協力者が集まった。とりわけ、若者や女性の活躍が目立った。ミシュリヌ・カーアンもそのひとりである。1913年生まれで、プロテスタントのスカウト組織のメンバーであった。子どものあずけ先をさがして、彼女は自転車で北西部のオルヌ県やサルト県を駆け巡った。断られると隣家をたずねながら、ひとり、またひとりと子どもたちをあずけていった。託した後にもたびたび様子を見に行ったが、場所をメモに書き残すのは危険だったので、あずけ先はみな覚えていた。元氣な彼女だったが、子どもから親の消息を聞かれるのは辛かった。そのときを思い出すと、「何年たっていても、当時と同じくらい動揺してしまうわ」と彼女は語っていたという<sup>38)</sup>。

町ぐるみで子どもを守ろうとしたところもある。たとえばフランス南西部タルン＝エ＝ガロンヌ県のモワサックでは、ユダヤ系のスカウト組織EIFのメンバーであったシモン夫妻が、住民の援助で寄宿舎を維持し、子どもたちを保護していた。キャシー・ケイサーの『エーディト、ここなら安全よ』は、この寄宿舎で過ごしたオーストリア生まれのユダヤ人少女エーディト・シュワルプの実話に基づき、子ども向けに書かれた物語である。迫害を避けるため、シュワルプ一家はウィーンから南フランスまで逃げてきた。だが42年11月、南部の自由地域がドイツ軍に占領され、父が逮捕されると、母は彼女と弟を寄宿舎に託し、「本当の自分をわすれないでね」と告げて身を隠す<sup>39)</sup>。43年3月のことである。このとき10歳だったエーディトは、不安を抱えながらも寄宿舎での生活になじんでいった。しかし危険が迫り、8月には寄宿舎も閉鎖された。彼女は別の名前を与えられ、



大西洋岸に近いとあるカトリックの寄宿舎に、素性を偽って入り込んだ。だがそこにはなじめず、飢えにも苦しめられる。ゴミ箱をあさるような日々を送っていたが、やがて連合軍の爆撃がはじまり、新しい寄宿舎が危険になったので、今度は農家にあずけられた。幸いにも優しい家族で、エーディトはそこでフランスの解放を迎えることになる。父は戻らなかったが、母も姉も弟も生き延びて、再会を果たすことができた。

エーディトの命は、母の決断に加え、モワサック寄宿舎の関係者たちが寄宿舎閉鎖後も子どもたちの行き先を世話し、用心怠りなく行動したために救われた。そしてその背後には、ユダヤ人の子どもを匿うことは危険であると知りながら、子どもをあずかり保護しようとしたたくさんのフランス人の存在があった。子どもを逮捕し連行する、という常軌を逸した事態を目の前にして、名もなきおおぜいの人たちが、危険を覚悟でひそかに援助の手をさしのべたのである。そのようにして、ドイツ占領下のフランスでは、先の OSE の貢献も含め全体で 1 万人以上のユダヤ系の子どもたちが、匿われることによって命をながらえた<sup>40)</sup>。

だが、隠れて生きることは生やさしいことではなかった。子どもをあずかっていたすべての家庭が愛情に満ちた快適な場ではなかったし、不安を抱えた子どもに適切に対処できたわけでもなかった。養い親と心を通わせることができなかつた子がいた一方で、「本当の自分」がわからなくなつた子どもたちもいた。後者に関して有名なのは、フィナリー兄弟の例である。彼らの父は医師で、オーストリア生まれのユダヤ人であった。グルノーブル近郊に住んでいたが、妻とともに逮捕された。その直前の 1943 年末、夫妻は 2 歳と 1 歳の息子たちを人手にあずけた。ところが養い親になった女性は、幼い兄弟を修道会に託し、カトリックの洗礼を受けさせてしまう。戦後に兄弟のおぼが消息を求めた際にも、養い親は引き渡しを拒んで子どもたちを隠し続けた。おぼと養い親の間で争いが生じ、いつときは、カトリック教会とユダヤ教会の対立にまで発展しかねない状況になった。だが、両教会は冷静に行動した。フィナリー兄弟の洗礼は取り消され、ふたりはおぼの許に返されたのである<sup>41)</sup>。

この兄弟は、おぼがねばり強く捜索を続けたために、自分たちの出自を知ることができた。けれども、「本当の自分」がわからなくなり、別人として生きた子どもたちもいたのである。また、隠された子どもたちが自分を見失わずにいたとしても、親が移送されてしまえば、ほとんどの場合、

二度と会うことはできなかった。その上、恐怖と不安の中で身を隠して生きた経験は、子どもたち自身の心に大きな傷跡を残した。そうした彼らにとっては、戦後もまた苦難の歲月であったろう。第二次世界大戦期の「隠された子ども」たちがようやく、みずからその存在を明らかにし、自分たちの会合をもつようになったのは、1980年代末から1990年代にかけてのことであった<sup>42)</sup>。

## 7 「ボッシュの子」

ジャン＝ルイ・ベッソンの回想録に見たように、解放後のフランスではあちこちで、頭を丸坊主に刈られ、人びとの嘲笑にさらされた女性がいる。占領期にドイツ兵と性的関係をもったという理由からであった<sup>43)</sup>。彼女たちの腕にはしばしば、乳幼児が抱かれていた。ほどなく「ボッシュの子」と言われるようになる子どもたちの不幸は、そのときから始まった。

ジョジアーヌ・クリュゲールの『ボッシュの子』は、ドイツ兵の父とフランス人の母から生まれた著者自身の半生を書きつづけたものである。彼女は1942年に生まれ、フランス北部のソンム県において、祖母と母との3人で貧しく暮らしていた。母は家で手袋を編む仕事をして、めったに外出しなかった。学校にジョジアーヌを連れて行くのも、買い物するのも、祖母の仕事であった。あるときジョジアーヌは、級友たちに近づこうとして、「ボッシュの子、あっちにいて」と言われる。強烈なショックを受けたのだが、意味がわからない。帰宅後母にたずねると、母は「どうしてそんなことを訊くの！」と顔をこわばらせて叫んだ。「お前のパパはドイツ兵だったんだよ」と説明してくれたのは祖母だった。「おまえが大きくなったらわかるよ……他人が言うことはほうっておきな」。母が丸刈りにされないですんだのは、母の兄がレジスタンス活動家だったからという。だがその人物は、自分の娘がジョジアーヌに近づくことは許さなかった<sup>44)</sup>。

ジョジアーヌは学業に優れていたが、母は表彰式にも学校行事にも一度も姿を現さなかった。母はやがてフランス人男性と一緒にになり、ジョジアーヌの父のことはついに語らずじまいだった。母の沈黙の中で、ジョジアーヌは苦しみ続けた。「その傷がわたしの全生涯を蝕んできた」と彼女は言う。とはいえジョジアーヌには、彼女を守ってくれた祖母がいたし、学校の先

生の中にも理解者はいた。実の父とも、一度だけ会ったことがある。母が隠していた手紙から父の居所をつきとめたジョジョアヌが、こっそり連絡をとったからであった。父はドイツで結婚しており、ジョジョアヌは長じてからは、その家族とも親交を深めることができた。それでも彼女は、「いまだにわたしは、自分がノーマルな人間ではないという印象を拭いきれない」と語る<sup>45)</sup>。

「ボッシュの子」には、辛い子ども時代を過ごした人が多い。たとえばダニエルがそうだった。彼は1943年に生まれた。両親はありがちなロマンスの結果結ばれた。自転車が故障し困っていた女性を、ひとりの若者が助けたのだ。若者はドイツ兵で、1945年に死んだ。ダニエルは4歳のときからブルターニュの祖母のもとで育てられた。だが、祖母は金髪碧眼の孫を可愛がることなく、棒でたたいたり鶏小屋に閉じこめたりした。近隣の人びとは好奇と侮蔑の目で彼を見た。だから子どものときには、ドイツ人の息子であることがずっと恥ずかしかったとダニエルは言う。丸刈りにされないよう故郷をいち早く逃げ出した母は、時折たずねてくるだけだった。母にも言い分があっただろうが、「母がそう望んだなら、私の子ども時代をもっと良くすることができたと私は思う」<sup>46)</sup>。それでもダニエルはまだ、父の実家と連絡が取れただけ幸いであった。父は死ぬ前、ドイツの家族に息子の存在を知らせており、父の実家の人びとは彼に優しくしてくれたからである。

1941年にルーアン近郊で生まれたジャニーヌの場合、父のことはほとんどわからない。ヴェルナーと呼ばれたブロンドの陽気な青年で、後に東方戦線に送られたらしいという。母は出産後、結核にかかって入院していたが、44年6月、連合軍の爆撃の際、病棟が巻き添えになって死んだ。祖父の家に引き取られたジャニーヌは、そこでひどい虐待を受ける。「母親みたいにおまえも売女になるだろうさ」と祖父は言った。侮辱と殴打と嫌がらせが毎日のように繰り返された。足にはまだ痣が残っている。それゆえ祖父が死んだとき、14歳だったジャニーヌは「狂喜した」と語る。彼女は今でも、父の足跡を追っているという<sup>47)</sup>。

第二次世界大戦において、ドイツ兵とフランス人女性との間に生まれた子どもたちは20万人にのぼると見積もられている<sup>48)</sup>。その多くが、フランスの解放後長きにわたり、息を潜めるようにして生きてきた。彼らの多くは、実の父を知らない。そして親戚縁者や祖父母から、ときには生みの

母からさえ、「お前なんか生まれてこなければ良かったのに」というまなごしを向けられて育ってきた。ダニエルは語っている。「子どもにとって、自分が愛されていないと知るとは、大事なことではあるけれど、それほど恐ろしいことではないんだ。恐ろしいのは、愛するという高貴な感情を他人から拒絶されてきたために、自分も人を愛せないことなんだ<sup>49)</sup>。

第二次世界大戦中、レジスタンス活動家や人質として処刑された青少年たちの多くが、家族に遺書を残していた。彼らは息絶える瞬間まで、家族の愛情を感じることができた。また、占領下で隠れて生きてきたユダヤ系の子どもたちは、父母の思い出を胸に再会を祈りながら辛い日々を過ごした。ガス室にひとり送られた子どもたちさえ、父や母の面影を思い浮かべながら死んでいった。しかし「ボッシュの子」には、心の支えとなるような家族は存在しなかった。それどころか、彼らの多くが、自分は誰からも愛されず、よけいな存在でしかないと思いながら生きてきたのである。その苦悩はいかばかりだったであろう。老年期を迎えてようやく、この人びとは語りはじめた。そしてその訴えに、関心が示されるようになった。フランスのテレビ局が、彼らを取り上げたドキュメンタリー番組をはじめて放映したのは、21世紀に入った2002年のことである<sup>50)</sup>。

## 註

- 1) 第二次世界大戦期のフランスについては渡辺和行『ナチ占領下のフランス——沈黙・抵抗・協力』(講談社・1994)、同『ホロコーストのフランス』(人文書院・1998)参照。
- 2) Yaël HASSAN (texte), *Pendant la Seconde guerre mondiale*, Gallimard Jeunesse, 2005.
- 3) たとえば、もう少し年長の子どもを対象にした Paule DU BOUCHET, *Dans Paris occupé*, Gallimard Jeunesse, 2005にも、主人公の少女がパリ脱出時に混乱の中で知り合ったユダヤ人家族と、少女の家族との交流が描かれている。また、Yaël HASSAN がより年少の読者を念頭に置いて書いた *À Paris sous l'Occupation*, Casterman, 2000では、主人公の友人の母であるユダヤ人女性が隣人に密告される。
- 4) Jean-Louis BESSON, *Paris Rutabaga : Souvenirs d'enfance 1939-1945*, 2005, p. 4. (ジャン＝ルイ・ベッソン著、加藤恭子・平野加代子訳、澤地久枝解説『ぼくはあの戦争を忘れない』(講談社・2001)。この日本語版は、1995年に出

- 版されたフランス語版の英訳本を訳出している。なお、訳は筆者（以下、註8）まで同様）。
- 5) BESSON, *op. cit.*, p. 45.
  - 6) *Ibid.*, pp. 57, 62.
  - 7) *Ibid.*, pp. 72, 74, 81.
  - 8) *Ibid.*, p. 4.
  - 9) マルク・ブロック著、平野千果子訳『奇妙な敗北——1940年の証言』（岩波書店・2007）、30頁。
  - 10) Lucie AUBRAC, *La Résistance expliquée à mes petits-enfants*, 2000. なお、児童書として出版された山本耕二『祖国フランスを救え——レジスタンスにかけた青春』（草の根出版会・2001）83–87頁にも、夫妻の話が紹介されている。
  - 11) AUBRAC, *op. cit.*, pp. 9–14.
  - 12) *Ibid.*, p. 19.
  - 13) Jean-Pierre AZÉMA, *1940 : l'année noir*, 2010, p. 407.
  - 14) Raphaël DELPARD, *La Résistance de la jeunesse française 1940–1944*, 2009, pp. 45, 69–70.
  - 15) *Ibid.*, pp. 131–143. 山本、前掲書、82頁。
  - 16) Philippe CHAPLEAU, *Des enfants dans la Résistance (1939–1945)*, 2008, pp. 33–39, 71–75.
  - 17) *Ibid.*, pp. 122–123.
  - 18) Jean-Pierre AZÉMA, “Guy Môquet, Sarkozy et le roman national”, *L'Histoire*, no 323, 2007, pp. 7–11.
  - 19) Jean-Marc BERLIÈRE et Franck LIAIGRE, *L'affaire Guy Môquet : Enquête sur une mystification officielle*, 2009, pp. 17–41.
  - 20) *Ibid.*, pp. 40, 45–58, 85–99.
  - 21) *Ibid.*, pp. 107–112.
  - 22) *Ibid.*, pp. 119–123 ; AZÉMA, art. cit., p. 8.
  - 23) CHAPLEAU, *op. cit.*, p. 11.
  - 24) BERLIÈRE et LIAIGRE, *op. cit.*, pp. 63–83 ; AZÉMA, art. cit., pp. 10–11.
  - 25) AZÉMA, art. cit., p. 11.
  - 26) アネット・ヴィヴィオルカ著、山本規雄訳『娘と話すアウシュヴィッツつてなに？』（現代企画室・2004）、29–30頁。
  - 27) 以上の経過については、渡辺『ナチ占領下のフランス』130–138頁。また Céline MARROT-FELLAG ARIOUE, “Les enfants cachés pendant la seconde guerre mondiale aux sources d'une histoire clandestine”, *Le compte-rendu de l'hommage public à Yvonne et Roger Hagnauer, le samedi 4 juin 2005 à Sèvres* (textes en ligne : lamaisondesevres.org/), partie I : Enfants cachés, enfants en danger-

- La situation des enfants juifs 1940–1942 ; Serge KLARSFELD, *La Shoah en France 4 : Le mémorial des enfants juifs déportés de France*, 2001, pp. 35–51.
- 28) MARROT-FELLAG ARIOUE, art. cit., partie I ; KLARSFELD, *op. cit.*, pp. 56–57.
- 29) KLARSFELD, *op. cit.*, pp. 57–58.
- 30) *Ibid.*, pp. 63–64.
- 31) *Ibid.*, p. 116. UGIF は Union générale des israélites de France で、1941年11月の法律によって設立された。フランスの全ユダヤ人を代表する占領期唯一のユダヤ人の公的組織。渡辺『ナチ占領下のフランス』、140–141頁。後出のOSE も EIF も、以後はすべてその中に統合された。
- 32) エレーヌ・ベール著、飛幡祐規訳『エレーヌ・ベールの日記』(岩波書店・2009)、170頁。エレーヌとその家族は秘密裏に、ユダヤ系の子どもたちを救う地下組織においても活動していた。
- 33) KLARSFELD, *op. cit.*, p. 10.
- 34) *Ibid.*, p. 755.
- 35) *Ibid.*, pp. 9–10. 渡辺『ナチ占領下のフランス』139頁。
- 36) デボラ・ドワーク著、芝健介監修、甲斐明子訳『星をつけた子供たち——ナチ支配下のユダヤの子供たち』(創元社・1999)、101頁。
- 37) MARROT-FELLAG ARIOUE, art. cit., partie II : Juifs et chrétiens au secours des enfants 2) L'Œuvre de Secours aux Enfants—O.S.E..
- 38) DELPARD, *op. cit.*, pp. 162–164.
- 39) キャシー・ケイサー著、石岡史子訳『エーディト、ここなら安全よ——ユダヤ人迫害を生きのびた少女の物語』(ポプラ社・2007)、54頁。EIF は Éclaireurs israélites de France。1923年に設立されたユダヤ人のスカウト団体で、占領期にはUGIFの第6機関に位置づけられた。シモン夫妻はEIFの幹部メンバーであった。MARROT-FELLAG ARIOUE, art. cit., partie II 3) Les Éclaireurs israélites de France.
- 40) MARROT-FELLAG ARIOUE, art. cit., Conclusion.
- 41) André KASPI, “L'église et la synagogue : L'affaire des enfants Finaly”, *Les collections de l'Histoire*, no 10, 2001, pp. 92–97.
- 42) Danielle BAILLY (coordonné), *Enfants cachés : Analyses et débats. Actes de la Journée d'Étude du 18 novembre 2005*, 2006, p. 45.
- 43) 平稲晶子『『丸刈りにされた女たち』——第二次世界大戦時の独仏比較』『ヨーロッパ研究』第8号(東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター・2009)を参照。
- 44) ジョジアーヌ・クリュゲール著、小沢君江訳『ボッシュの子——ナチス・ドイツ兵とフランス人との間に生まれて』(祥伝社・2007)、23–29頁。

第二次世界大戦期のフランスにおける子どもたち

- 45) 同上、27-28頁。
- 46) Jean-Paul PICAPER et Ludwig NORZ, *Enfants maudits*, 2004, pp. 29-42.
- 47) *Ibid.*, pp. 43-64.
- 48) *Ibid.*, p. 21.
- 49) *Ibid.*, p. 29.
- 50) クリュゲール、前掲書、185頁。